

# 「余命半年」何を望む？

## 福祉職対象 終末ケアの研修会

余命半年の宣告を受け、人生で大切なことを考えるゲームで、想像を膨らませる福祉職の人たち。小野市うるおい交流館 エクラ



小野

北播磨の福祉職を対象にした終末ケアの研修会が22日、小野市うるおい交流館エクラ（中島町）で開かれた。「病気で余命半年と宣

告された」と想定した約60人がその後の人生で譲れない5項目を選ぶゲームを通して、施設利用者が望むケアをより深く検討する必要性を認識した。

ふたばの里（小野市二葉町）▽伽の里（加東市天神）▽しんじょ（加東市新定）の3介護施設が主催。介護施設の創設や黒字化に取り組む藤井円さん（47）▽大阪府茨木市▽が講師を務め、ケアマネジャーや介護士、看護師らに人生の最後で本当に必要なものを探す「もしバナゲーム」を紹介した。

35枚のカードには「大切な人とお別れをする」などと書かれており、余命半年の想定で大事にした言葉を五つ選び、選んだ理由をほかの3人と語り合う。

加古川市内の老人保健施設で介護士を務める城谷英典さん（38）は「誰かの役に立つ」を選択。腎臓の難病を抱え、長く生きられない

恐れがあるといい「趣味のエイサーを究め、いい人生だったと思えるようにするのも目標」と語った。

小野市内の介護士の女性（33）は「人生の最期を一人で過ごさない」というカードについて「死期が迫ったおばあちゃんに『よう頑張

ったね』と声を掛けたら、安心したように息を引き取った。誰も一人では死にたくないのだと思う」。

藤井さんは「死という縁起でもない話をもっと身近に、当たり前前に行けるようにしなくては」と話した。（笠原次郎）